

研究ノート

文の風景
—名詞句の時間からみえる文底の諸相—

樋野幸男

富山大学人文科学研究第84号抜刷

2026年3月

文の風景

—名詞句の時間からみえる文底の諸相—

樋野 幸男

0. はじめに

《文があらわすもの》を考究した前稿¹⁾でみてきた文のすがたは、文の動機となる〈文底〉とその属性たる〈命題〉とに帰結した。ただし、考察の対象としたのは、主題のない単純な完成相動詞述語文である。

その帰結は、室町時代語を反映する『中華若木詩抄』の準体句（現在は〈準体構造〉とよぶ）分析からはじまり、現代語における所謂〈主部内在関係節〉が準体構造であることへの理解に不可欠な《名詞句の時間（その限定および推移）》につながる。その周辺では文のすがたが髣髴とする。本稿は、素朴な日本語研究の立場から文の周辺にみえる風景をえがいてゆく。

1. 文の時制およびアスペクト

次の文章は過去・現在・未来にわたる万博パビリオン建設工事の進捗状況を述べるものだが、これを素材にして文の時間を考えてみよう。

2025年大阪・関西万博の開幕まで9日で400日、参加国が自前で建設するタイプのパビリオンも^(a)55カ国中8カ国が着工し、現地は^(b)多数の工事車両が行き交う。起工式や外観イメージの公表も相次ぎ、建設遅れの挽回ムードが高まりつつあるが、なお3割超の国で建設業者が決まらず、楽観できない状況だ。そこへ来て、^(c)思わぬ「障壁」も浮上している。（毎日新聞ニュースメール「海外館建設 輪をかけて困難に？ 万博400日前、立ち上がる「壁」」2024.3.9）

下線部(a)(b)(c)の時間とアスペクトは以下のとおりである。

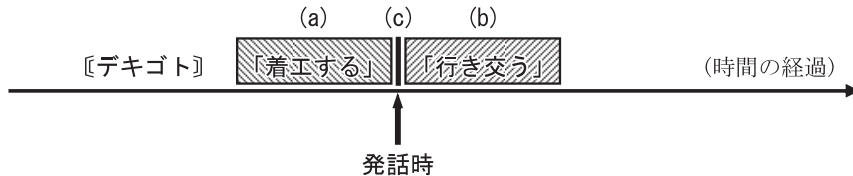
- (a) 55カ国中8カ国が着工し → 完成相・過去（過去の標示なし、=タトコロデ）
- (b) 多数の工事車両が行き交う → 完成相・非過去（未来）
- (c) 思わぬ「障壁」も浮上している → 継続相・非過去（現在）

文脈から「着工する」⇒「行き交う」という運動の交替が明らかで、(a)はル形のままだも、

1) 〈主題のない単純な完成相動詞述語文〉について述べた拙稿(2024)。本稿2節にその帰結の概略を述べる。なお、本稿の参考文献には前稿のものを再掲する。

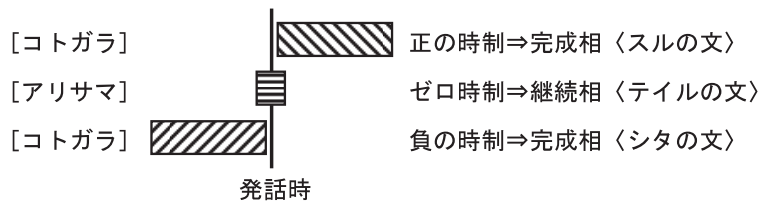
過去であることが自明だ。要点は、(b)がテイルの文でないこと²⁾。テイルの文は発話時のみを述べるから、過去と未来（状況の進展）が対照的にあらかわせない。なお、このあと現在の状況が(c)テイルの文で述べられる。（←図1参照）

【図1】

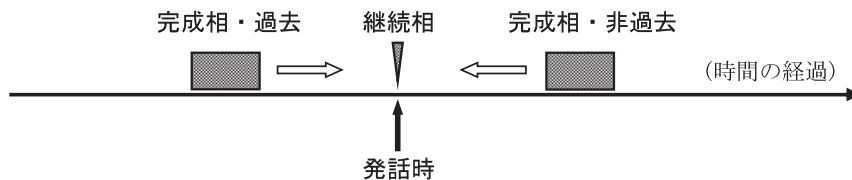


さて、発話時に対して持続する運動（動作）の時間的關係は3種類だが、動詞完成相には過去から未来にわたって（発話時をまたいで）運動[コトガラ]を表示する言語形式がない³⁾ため、動詞継続相により発話時（瞬間）の運動[アリサマ]で表示する。（←図2参照）さらに、2つの完成相の運動が極限まで発話時に近づくと、文底の生じる範囲が縮小され、過去の文では直前のデキゴト（実質的に動作の完了）、未来の文では直後のデキゴトをあらわす。（←図3参照）

【図2】



【図3】



〔補足〕私たちは原始の時代から未来に向かって生きている。過去をふりかえるのは特別な場合だ。未来の時間には無意識だが、過去の時間には意識的になる。そのため、言語の制度もそ

2) テイル形にしても文意はとおり、「現在」の状況をしめすことになるが、この文章では「現在」よりも今後の状況をしめすことが有用だ。えらばれた形を尊重して解釈するのが文に忠実である。

3) タ形は過去、ル形は非過去（未来）をあらわす。

れを反映して、未来の時間が無標形式をとるのに対して過去の時間が有標形式をとるのだと考えられる。

2. 文は発話時を基点に文底の状況をあらわす

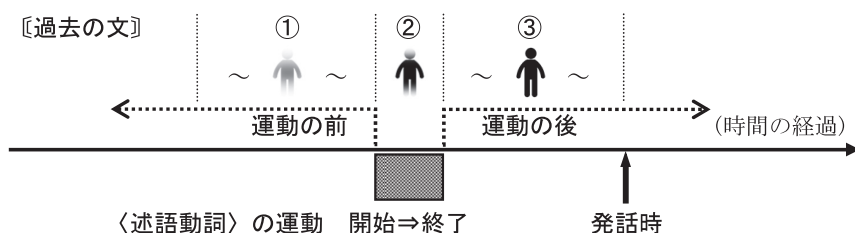
まず、前稿で提唱した文のすがたを簡潔に復習しよう。さて、完成相動詞述語文「あした太郎が富士山に登る。」(未来の文)を被験者に聞かせると、〈登る前〉の「太郎」がその脳裡に残る。過去の文／未来の文で実験した結果、|過去の文⇒運動の後／未来の文⇒運動の前|の主体「太郎」が文の記憶として脳裡に残ることがわかった。(pp.126-129)それが文のあらわすもの(＝文底)で、運動中の主体「太郎」(＝主語)は文の叙述時間⁴⁾にあるのに対して、記憶に残る「太郎」は叙述時間の埒外にある。このことから、《文は文底が命題(≡文)の叙述内容を属性にもつ》という結論にいたる⁵⁾。また、この結論は、過去の文なら、文は文底が過去にドウダツタカ(過去の状況)発話時を基点に述べるものだ、と換言できる。

念のため、つぎの文において文底の時間的位置を確認しておこう。

(1) きのう太郎が富士山に登った。(過去の文)

(1)の文底は「太郎」(≠主語)だが、文底のありかは図4のように①・②・③の相対的な時間間隔が想定できる。「太郎①」は運動の前、「太郎②」は運動の進行中、「太郎③」は運動の後。このうち、命題の叙述内容に適合するのは③にかぎる⁶⁾。前述のとおり、実験では文の記憶として「太郎③」が選ばれた。(←図4参照)

【図4】



4) 叙述時間とは、述語動詞の作動する時間、あるいは、述語動詞の運動が進行する時間である。

5) 詳細は前稿を参照のこと。前稿では、「たどりついたのは、《文は、デキゴトを叙述することで、文底をつたえる》という事実だ。文底とは、文の叙述時間の外縁に位置する(おもに)主語名詞句の姿である。それを《文があらわすもの》だと感じるのではないか。(p.132)」とまとめた。この主張は名詞句の時間的限定の観点から推論される。なお、この文では「富士山に登る」が〈運動〉。

6) 文底は人形の位置で、人形の濃淡は適合度をしめす。その根拠は、①が〈登る前〉で否、②も〈登る途中〉で「登った」といえないから否、③だけが〈登った後〉で適合する。

あらためて、「きのう太郎が富士山に登った。」の文があらわす内容は、命題「きのう太郎が富士山に登った」を属性にもつ文底「太郎」が命題の叙述時間の直後から発話時の直前までに存立することだといえる。

3. 継続相の文をたしかめる

前稿において完成相・動詞述語文をとりあげて考察をすすめたが、継続相の文〈テイルの文〉でも同じように文底が形成されるのだろうか、たしかめてみよう。

簡単な継続相・動詞述語文を作成して、同じ方法により少数の被験者に実験した。つぎの文を使用した。その結果と分析をしるす⁷⁾。

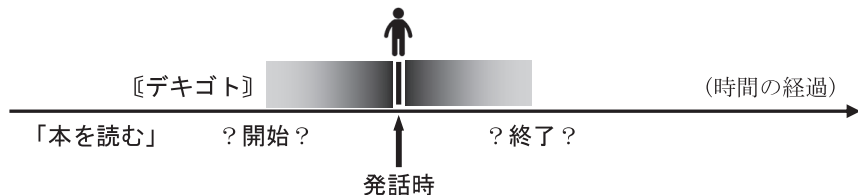
私のとなりで太郎が本を読んでいる。

(イ) その「太郎」は、つぎのどれに該当しますか。

- ① 読書の前 ② 読書中 ③ 読書の後 ④ その他

完成相動詞述語文では文底が成立した。それと同じ方法で実験したが、5人全員が②読書中と回答した。当然の結果だろう。この場合、記憶に残った「太郎」が、「本を読む」運動の進行中の時間域に形成されたと考えられる。命題(≒文)の叙述内容に登場する「太郎」と記憶のそれとが一致するため、文底はあらためて生じない。ただし、文モメント⁸⁾が話し手に生じて発話が行われることはわからない。継続相の文は、主体が運動の進行中にあることをあらわすが、その運動がいつ始まっていつ終わるかには関心がない⁹⁾。(←図5参照)

【図5】



7) 実施日：2024年3月6日 勤務校（当時）にて、被験者：勤務校（当時）の事務職員および学生5人、実施方法：前稿の実験と同じ。

8) 前稿を参照されたい。〈文底〉と基本的に同一の概念だが、それを話し手の側から再定義した呼称。

9) 図5のデキゴトの矩形の両端が淡いのはデキゴトの開始/終了に文が無関心であることをしめす。

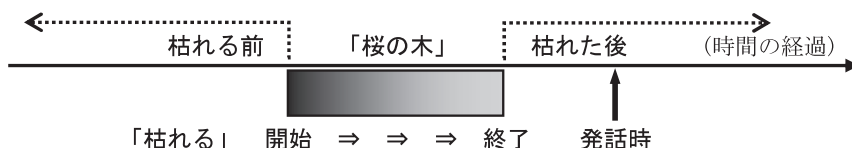
4. 名詞句の時間について

文が混沌とした現象から抽出した事象¹⁰⁾を叙述するものであれば、時間のながれに铸込まれた事象を叙述するために使用される名詞句が時間性をもつことは必然である¹¹⁾。ただし、文中の名詞句すべてが時間性を保持するわけではない。まず、時間性をもつ名詞句の文をみてみよう¹²⁾。

(2) 桜の木が枯れた。

この「桜の木」は植物 (=生物)、自然の樹木が徐々に枯れてゆく。なお、桜の木のような自然物でなくても、すべてのモノ (物質的個体) は徐々に変化する。図6は、濃から淡へ色調が推移する矩形が述語動詞「枯れる」の叙述時間をしめし、少しずつ枯れてゆく「桜の木」の変化をあらわす。変化は時間のながれの中で生じるから、「桜の木」は時間性をもつといえる¹³⁾。

【図6】



さて、一般的に上記のような具体物 (物質的個体) をあらわす名詞句NPを考えてみよう。たとえば(2)の「桜の木」のように、名詞句NPは、うつりゆく時刻 t によって推移する変数と考えられる。この場合、「枯れる」という変化があるから当然だが、健全な植物でも時間とともに成長するから、やはり推移する変数とみなせる。したがって、比喩的に時刻 t の関数で $NP(t)$ と標示することができる。

次の2つの文で時間性を確認してみよう。

10) 前稿 (p.118) に筆者の見解を述べた。話し手が言語によって表現する対象として選定した伝達しようとするデキゴト。

11) 後述する影山太郎 (2011) のデキゴト名詞に関する時間の理解と筆者の名詞句の時間の理解とは時間のとらえ方 (論点) が異なるが、筆者の主張に有効な部分を援用して考察を深めたい。なお、本節では筆者の提唱する文底について言及しない。

12) 〈時間性〉とは、当該の名詞句の属性を規定するのに時間の概念が避けられない性質だが、当面の論述においては、瞬間を除いた長い時間 (=非瞬間的時間) に限定してよぶ。なお、〈時間〉と〈時刻〉とは異なる概念だが、厳密には「時刻」というべきときも「時間」ということがある。

13) 時間性を保持しない名詞句の例については後述する。

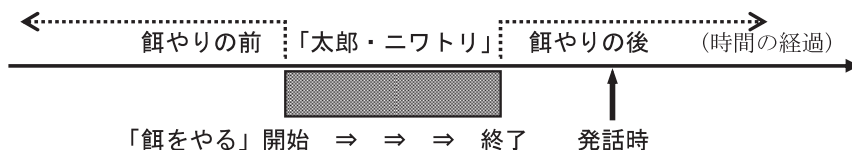
(3) ヒヨコがニワトリになった。

(3)の主語「ヒヨコ」は時間の推移によって「ニワトリ」に成長してゆくが、補語「ニワトリ」は推移する到達点としての心象（観念）で物質的個体といえない。こちらは NP(t) とならず定数 c とみなせるから、時間性をもたないことになる。

(4) 太郎がニワトリに餌をやった。

一方、(4)の「ニワトリ」はヒトが飼育する具体物としての「ニワトリ」だから、時間性をもつ。付言すると、「太郎」と「ニワトリ」はともに「餌をやる」の叙述時間に作動する。つまり、その時間に限定される。(3)の「ニワトリ」は到達点で、成鳥の状態（=観念）をあらわすといえる。（←図7参照）

【図7】



デキゴトは文でしかあらわせない。時間のながれの中で生起するデキゴトを文にすれば、文中の名詞句（物質的個体）も時間からのがれることができない。

5. デキゴト名詞とモノ名詞

ここで、名詞句の時間について述べた影山太郎(2011)をてがかりに考えてみよう。影山は〈モノ名詞〉と〈デキゴト名詞〉を対照的にとらえる。

モノ名詞 (entity noun) :

一刻一刻その姿を変えていくということはない（ポストを例に、p.38）

デキゴト名詞 (event noun) :

出火から消火まで一刻一刻変化していったと想定できる出来事を指す（火事を例に、p.38）

両者の本質的な相違は時間の概念が関与するかどうかである…… 典型的なモノ名詞は、「鉛筆、自転車、砂」のように単純な物質を表し、そこには時間の概念は関係していない。ここでいう時間の概念とは、ある出来事や動作がどれぐらい継続し、いつ終わったかといった概念（中略）を指し、それは典型的には動詞が担当する意味概念である。動詞の典型的

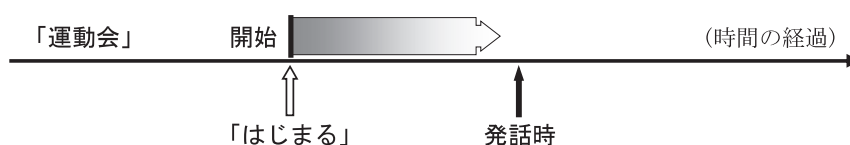
な機能は時間の流れに沿った事象（中略）の展開を表すことであり、デキゴト名詞にはそのような時間的（アスペクト的）な概念が多少とも関わっている。（下線は筆者、p.43）

影山は、デキゴト名詞には「時間の概念」が関係するが、モノ名詞には関係しないとする。その理由は前者のもつ動的推移にだけ目をやり、後者の静的推移を見すごしたからと考えられる。

また、「1時間の会議、今朝の事故、昨日の食事、2日間の運動会」（p.42）をあげて、デキゴト名詞「会議」「事故」「食事」「運動会」が時間表現と結びつくことに注目する。しかし、静的推移の場合でも長い時間を考えて「工場で生産された鉛筆」「明治時代の自転車」「川から流れてきた砂」とすれば、それぞれの名詞句を修飾する「工場で生産された」「明治時代の」「川から流れてきた」はいずれも時間性をもつといえるから、モノ名詞にも時間との関係がみえてくる¹⁴⁾。

影山は動詞の時間性を認める立場からデキゴト名詞のみにそれを認めるが、筆者は華々しいデキゴト名詞と異なる静かに時間の中に沈潜するモノ名詞にも時間性が認められると考える。ただし、デキゴトにも瞬間的なそれがあるが¹⁵⁾、ときに長い時間をもつデキゴトもその瞬間を切りだして文に参加することもある。たとえば、瞬間動詞を述語とする文では、「9時から運動会が**はじまった**。」のように、「運動会」が述語動詞「はじまる」に支配されて数時間の長さから切りだされた開始の瞬間を指示する。一方、いつ終わるか、この文は関知しない。このことは名詞句の時間的限定にあたる。（←図8参照）

【図8】



14) 私たちは時間の関数 $NP(t)$ について定数を除外して考えがちだが、数学における関数の概念が定数を差別しないように、比喩的にいう関数 $NP(t)$ も定数であることを排除しないのが正しい考え方だといえよう。ただし、理論的には厳密に定数ではあらず、生物でも無生物でも物質的個体は成長や劣化など知覚できない微細な変化を常に生じている。すべての物質は時間の中で存在する、存在とは時間を前提とした概念であるから。

15) たとえば「出発／到着」は「出発／到着の時間は午前10時だ。」のように瞬間的なデキゴトだ。

言語の分析において、影山のように名詞句を文からとりだしてその性質を観察するのと、文の中でそれを観察するのとは、みえ方が異なってこよう。筆者は後者の分析が文のすがたに近づく方法だと考える。ところで、どのような文においても、デキゴト名詞は必ず時間性を帯びるだろうか。影山の考えが新たな疑問をよびおこす。

6. 述語動詞がデキゴト名詞・モノ名詞の時間をきめる

あらためて、デキゴト名詞の文とモノ名詞の文をくらべてみよう。「太郎」など人間を含めた生物もモノ名詞とする。「試合が終了した。」「会議がはじまる。」はデキゴト名詞が主語である。

さて、モノ名詞を主語とする単純な動詞述語文をとりあげる。まず、生物の文。

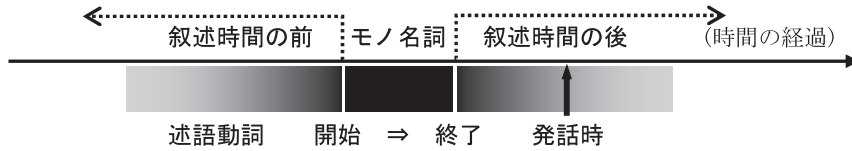
- (2) 桜の木が枯れた。(再掲)
- (5) もうすぐ花が咲く。
- (6) パンダが死んだ。
- (7) きのう子どもが生まれた。

桜の木も花も植物で時間とともに推移する。動物も人間も生老病死を経験しながら移り変わってゆくことは同じである。つぎに、無生物の文。

- (8) 材木が腐った。
- (9) コンクリートが劣化する。
- (10) 金属がさびる。
- (11) ガラスが割れた。

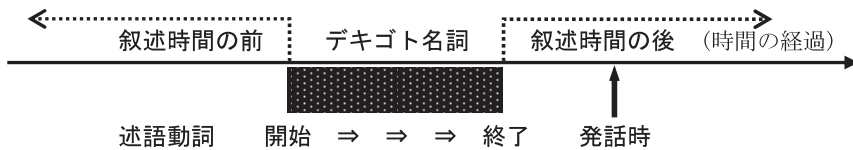
(8)材木の腐敗は想像できるが、(9)コンクリート・(10)金属はいずれも人工物で変化しないと認識されがちだが、超日常的時間を考えると変化がみとめられる。一方、(11)ガラスは瞬間的に破壊する材質で変化がわかりやすい。前者4つのモノ名詞は自然の生物、後者4つのモノ名詞は素材で無生物、さらに器材のモノ名詞(自動車・鞆・机・…)もある。生成(例「生まれる」)・消滅(例「死ぬ」)にかかわる動詞述語文の主語になる場合を除けば、これらのモノ名詞は述語動詞の叙述時間にしばられず存立する。(図9参照)過去の文をしめした図9の短冊形の両端が淡色なのは、モノ名詞の存立する始点と終点が確定しないことを意味する。なお、長い叙述時間の文をしめしたが、叙述時間が瞬間となる文では開始/終了が一致する。

【図9】



同じようにデキゴト名詞を考えると、「9時から運動会がはじまった。(前掲)」の文について述べたように、述語動詞がデキゴトの開始の瞬間を切りだす文もあるが¹⁶⁾、「きのう体育祭が開催された。(後掲)」のようにデキゴト全体を対象とする文も多い。いずれにしても、デキゴト名詞が機能的にその時間的総体を指示する¹⁷⁾ところを、モノ名詞がそれを指示しないところが異なる。その理由は、モノ名詞に時間的限定が発動するからである。(←図10参照、過去の文)

【図10】



けっきょく、デキゴト名詞とモノ名詞とを対照的に捉えようとした影山が、モノ名詞に時間の観念(時間性とよぶ)を認めないのは、人間の観察可能な日常の時間を超える長大な超日常的時間¹⁸⁾を考慮しなかったからだろう。どんなものも時間の経過の中で必ず変化を生じる。

7. デキゴト名詞の文にも文底が生じる

前稿ではモノ名詞を主語とする文をとりあげたが、デキゴト名詞の文でも文底が生起するのたしかめよう。さて、3節で継続相・動詞述語文をたしかめたのと同様に少数の被験者に実験した。デキゴト名詞を主語とする単純な完成相・動詞述語文だ。使用する2つの文は、[体

16) 開始の瞬間だけでなく、デキゴト全体から述語動詞の指向により適宜その部分を切りだす。「おわる」は終了の瞬間。「運動会を3時間だけ見学した。」は全体から3時間だけ切りだす。

17) そうでなく、その時間的部分を指示する場合も、その時間的総体を前提とすることをあわせて指示する。

18) 「腐る」「劣化する」「さびる」といった動詞の時間。

育祭が開催される] をもとに過去と未来で対立するよう時の副詞を付加して作成した。その結果と分析をしるす¹⁹⁾。

きのういちにち体育祭が開催された。(過去の文)

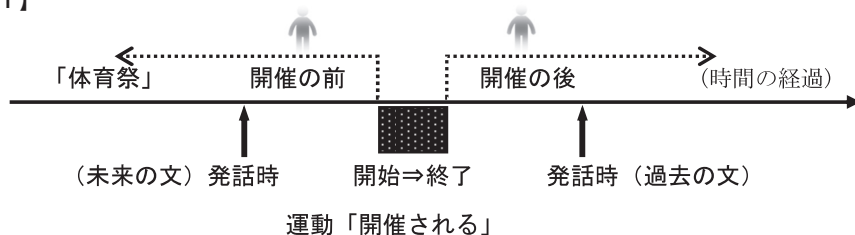
あした体育祭が開催される。(未来の文)

(イ) その「体育祭」は、つぎのどれに該当しますか。

- ① 開催の前 ② 開催中 ③ 開催の後 ④ その他

過去の文：4人と未来の文：4人、個別に実験した。過去の文²⁰⁾では、4人全員が③開催の後と回答した。未来の文では、4人のうち1人が②開催中と回答したが、3人が①開催の前だった。1人を除いて前稿の実験で得た法則「過去の文⇒運動の後／未来の文⇒運動の前」となり、モノ名詞を主語とする文を対象とした実験とほぼ同じ結果を得た。したがって、デキゴト名詞の文においても文底が生じるものと考えられる。(←図11²¹⁾参照)

【図11】



さて、2節でとりあげたモノ名詞の図4と比べてみよう。文底をみると、「太郎」は文底の位置する時間域に実在するが、「体育祭」は「すでにおわった／まだはじまらない」からその

19) 実施日：2024年3月14・15日 勤務校（当時）にて、被験者：勤務校（当時）の事務職員および学生8人、実施方法：前稿の実験と同じ。

20) 当初「きのう体育祭が開催された。」を考えたが、「開催される」が瞬間的（<<はじまる>>の意）に理解されうるため、持続的であることを明示する「いちにち」を付加しておこなった。

21) 過去および未来の文を1つの図にした。人形は「体育祭」をしめす。ほかしたのは開催の時間からはずれている意。

時間域に実在（運行）しない²²⁾。つまり、私たちは、時間的に実在（運行）しないナニカ（仮想の「体育祭」）を文底として脳裡に想起しながら言語活動をおこなうのである。そこで、次節でそのことをあらためて考えてみよう。

8. 仮想言語体を予想する

それでは、実際に生じる機構について確認しながら合理的な理解をこころみよう。はじめに、この事実を制度としてみとめた上できちんと規定しよう。つぎのとおり。

仮想言語体：デキゴト名詞の文において、デキゴトの運行する時間域に到達する以前（未来の文）、あるいは、そこを経過した以後（過去の文）には、デキゴトの実体が存在しない。そのとき、言語活動を保障するため、話し手の精神作用によってその不在の時間域に仮想的に形成される観念的言語体。

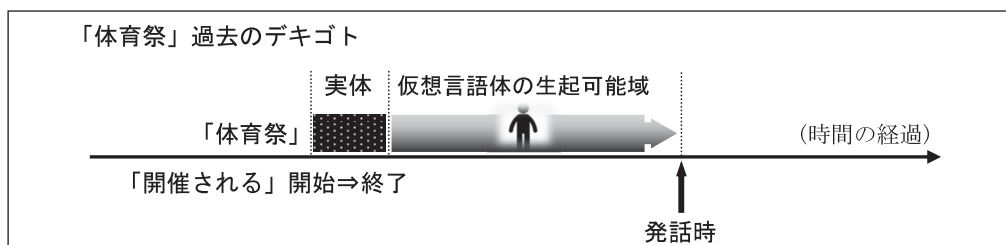
この規定に述べた機構は、私たち自身ふだん実感することもないが、本稿の記述から帰納されるもので、言語活動によって生じる構成体という意味で〈仮想言語体〉とよぶことにする。

仮想言語体の形成はデキゴト名詞をモノ名詞と同様に運用するのに不可欠で、実体の消滅後これを生じることが言語活動を保障する。

さて、仮想言語体の例をいくつか紹介して解説してゆこう。なお、文底（人形の標識）となる仮想言語体の形成される状況を図示する中で、帯状の矢印はその生起可能な時間域を意味する²³⁾。

最初に、前述の実験で使用した過去の文。図1 2の左端「実体」の時間域に過去のデキゴト「体育祭」が運行する。その終了直後から発話時直前までは実体のない時間域で、そこが仮想言語体の生起可能な時間域となる。そこに仮想言語体たる文底が生じるが、時刻は確定しない。

【図1 2】 「きのういちにち体育祭が開催された。」

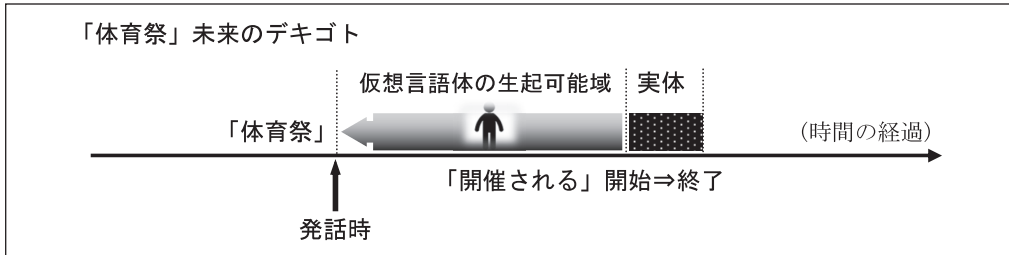


22) 前節でみたように、デキゴト名詞はデキゴトの運行時間と命題の叙述時間とが一致する文が頻出するのに、モノ名詞はモノの実在時間と命題の叙述時間とが一致する文があらわれにくい点が異なる。

23) 本稿の各図は論述の内容にあわせて標示するため、全体をとおして標示のしかたが一貫しない。

つぎに、同じく未来の文。図13の右端「実体」の時間域に未来のデキゴト「体育祭」が運行する。発話時直後からその開始直前までは実体のない時間域、以下おなじ。

【図13】 「あした体育祭が開催される。」



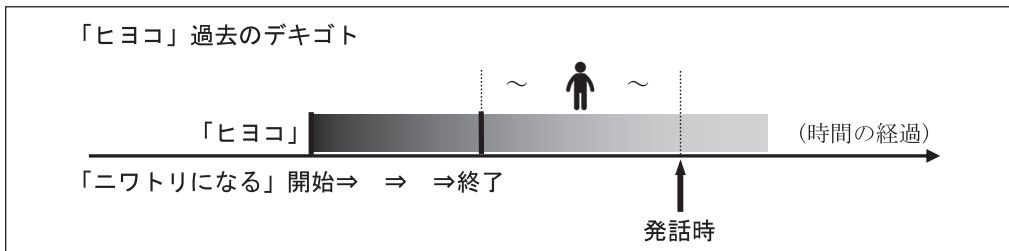
まとめると、これらの文の「体育祭」は、述語動詞「開催される」が作動する文の叙述時間に実体として運行する。一方、「体育祭」の記憶である文底は仮想言語体によって形成される。

9. モノ名詞の文にも仮想言語体が生じる

はじめに、生物のモノ名詞にも仮想言語体が生じるのか考えてみよう。

4節でとりあげた(3)「ヒヨコがニワトリになった。」はどうだろう²⁴⁾。文の叙述の前提として「ニワトリになる」運動が誕生の時刻に開始するとしよう。すると、それ以前には存在しないが、存在は死ぬまで継続する。図14の矩形が濃から淡へ推移するのは成長を、「終了」は成長の完了をしめす。その後も死にむけて推移する。発話時はニワトリだが、文底を形成する時間域ですでにニワトリとなっている。疑問は、文底がヒヨコかニワトリか、聞き手の記憶として残るのがどちらかという点。未実験のため不明だが、理論的にはニワトリと推測する。

【図14】 「ヒヨコがニワトリになった。」

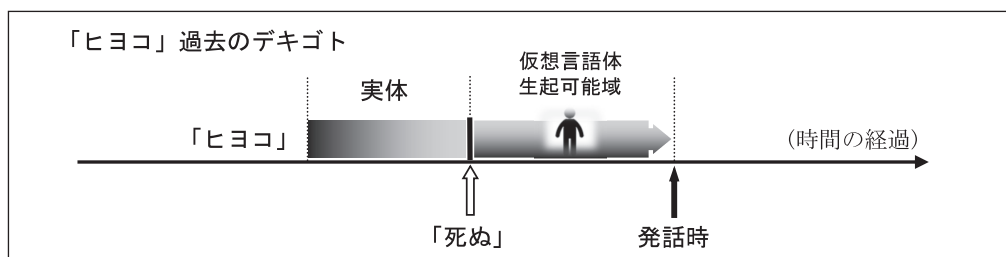


24) (3)の文は未実験のため、以降の記述はここまでの考察にもとづく推測である。

ここで、(3)の「ヒヨコ」(ニワトリ)は発話時に生存する前提。

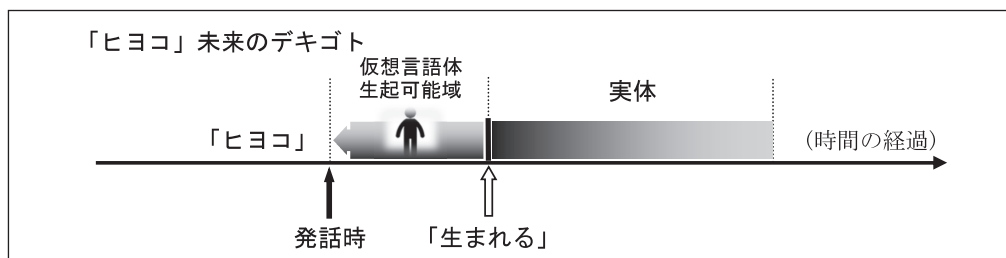
つぎに、過去の文「生後三日でヒヨコが死んだ。」を考えよう。「死ぬ」運動は瞬間的で、死亡の後「ヒヨコ」は存在しない。実体のない時間域に文底を形成するため、仮想言語体が生じる。生物のモノ名詞においても、仮想言語体が生起する文が確認できる。(←図15参照)

【図15】 「生後三日でヒヨコが死んだ。」



最後に、これと対照的な未来の文「もうすぐヒヨコが生まれる。」をとりあげる。「生まれる」も瞬間的な運動。誕生の前「ヒヨコ」は存在しないから、実体のない時間域に仮想言語体によって文底を形成する。生まれた後「ヒヨコ」がどうなるか、この文は関知しないが、死ぬまで実体をたもつ。(←図16参照)

【図16】 「もうすぐヒヨコが生まれる。」



3つの文を分析してわかるのは、前述したデキゴト名詞における仮想言語体だけでなく、生物を中心にモノ名詞にも仮想言語体が形成されることだ。考えてみると、仮想言語体は、脱現実的表出の可能性が言語の機構にしこまれた典型だ。それは実体の欠如する時間が生じたときに発動するのだろう。

10. おわりに

本稿は、筆者の提唱する文底にかかわる問題²⁵⁾を、時間の観点（名詞句の時間的限定）を足がかりに簡単な完成相動詞述語文をとおしてながめてきた。最後にたどりついた仮想言語体という概念は、だれもが感得する仮想的コトガラを表出という言語の特質をあらためて確認したにすぎない。

参考文献

- 寺村秀夫(1975-78)「連体修飾のシンタクスと意味—その1～その4—」(『日本語・日本文化』4～7、『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』(pp.157-320、1992年、くろしお出版刊)による。)
- 奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」(宮城教育大学『国語国文』8、松本泰丈(編)『日本語研究の方法』(pp.203-220、1978年、むぎ書房刊)による。)
- 高橋太郎(1986)「動詞の動詞らしさについて」(『国文学解釈と鑑賞』51-1、pp.6-16)
- 黒田成幸(1999)「主部内在関係節」(黒田成幸・中村捷(編)『ことばの核と周縁—日本語と英語の間—』pp.27-103、くろしお出版刊)
- 坪本篤朗(2003)「再び、主要部内在型関係節構文—「分離」と「統合」の間—」(『ことばと文化』6、pp.27-44、静岡県立大学英米文化研究室刊)
- 影山太郎(2011)「モノ名詞とデキゴト名詞」(影山太郎(編)『日英対照 名詞の意味と構文』第2章、pp.36-60、大修館書店刊)
- 樋野幸男(2016)「準体句をなす連体形を準体形とみれば—準体構造の本質をたずねて—」(『富山大学国語教育』41、pp.43-50)
- (2020)「基底核を発動する連体修飾の幻影」(『富山大学人文学部叢書Ⅲ 人文知のカレイドスコープ』pp.2-14、桂書房(富山市)刊)
- (2021)「基底名詞句ノ顕在スル準体構造の粗描」(『東海学園 言語・文学・文化』20、pp.85-94)
- (2024)「文のすがた—名詞句の時間的限定から—」(『富山大学人文科学研究』80、pp.117-133)
- 山梨正明(1995)『認知文法論』、ひつじ書房刊

25) 文底と命題は、山梨(1995: 11-15)が〈ルビンの盃〉を例にあげて述べる〔前景⇔背景〕・〔図⇔地〕の関係になぞらえることができよう。文のもつ文底が後者(背景・地)、命題が前者(前景・図)に対応する。ただし、後者は命題の主語(主体)に重なって明示されない。文底の由来は、言語の認知および運用の中から形成されたのかもしれない。

〔付記〕

本稿は、筆者の最終講義「文の風景—素朴な日本語研究を歩んで—」（2024年3月21日、富山大学人文学部）の内容をもとに作成したものです。

